

報徳博物館

友の会 だより
No.70

しもつけのくには が
報徳仕法ゆかりの地 下野国芳賀の里へ

去る6月5日(日)・6日(月)の両日、会員の皆様の日頃のご協力に感謝し、併わせて会員相互の親睦と研修とを兼ねて、第16回友の会見学ツアーを行いました。

丁度農繁期に当たった上に、毎回グループで参加頂いていた方達が、生憎海外旅行から帰ったばかりとかで、参加者数は例年になく少なめの30名でした。

行き先は、“報徳仕法発祥の地桜町”の一部を含む真岡市を中心とする栃木県の“芳賀の里”と、その北に接する烏山町でした。この辺り一帯は、二宮尊徳後半生の活躍の中心舞台とも言える地域だけに、尊徳の偉大な業績に触れることの出来る事物が多く、又、地理的位置からは関東のヘソとも言える地域で、古い時代からの歴史的・文化的遺産も多く、皆様にご満足頂けた見学会でした。なお、茂木町内の見学には、格別なご配慮と、雨中、懇切なご案内を頂いた笹島会長以下茂木報徳会の皆様に厚く御礼申し上げます。

1日目 -真岡~益子~茂木-

◇さあ出発

東京駅新幹線中央乗り替え口集合、定刻に遅れる人もなく、東京発8時36分の東北新幹線やまびこ105号で宇都宮下車。ここからはチャーターした



バスで見学地へ向かいましたが、座席に余裕があり(どうやら男性だけだったらしい)、道路は渋滞もなく真に快適な旅でした。

◇真岡陣屋跡

芳賀城跡(城山公園)の丘の南端の植え込みの中に、昭和13年11月設立の「二宮先生遺蹟真岡陣屋跡」の石柱が建っているだけ。それには、「先生幕府二登用セラレ御普請役格トシテ来陣セル所ナリ」と刻んでありました。

◇大前神社(表紙写真・下写真)

御祭神は事代主命(えびす様)と大己貴命で、境内には高さ20mのえびす様が建っています。



尊徳や二宮家の人々が何度も

参詣した記録があります。嘉永6年(1853)4月、江戸で発病した尊徳の平癒祈願をした物井村の万兵衛らは、お札を戴いて江戸へ向かいました。

東郷陣屋に赴任した尊徳が、前任者が空け渡すまで仮住まいした神宮寺跡は社殿の西側です。

◇山内明府功德之碑(4頁写真)

大前神社参道左の脇に建っており、尊徳幕臣時代の上吏真岡代官の山内総左衛門を顕彰した碑で、『報徳記』に述べられているのとは違った山内の一面が、小山春山の撰文で記されています。小山春山については本号4頁にあります。

◇大前堰

大前神社東側を流れる五行川の穴川用水路の取水口で、文政10年



4月、尊徳により改修され、木石使用の堰としては20世紀でも稀にみる堅牢な工法で、以後たびたびの洪水にも堪えました。参道脇の堤防上の2基の碑には、用材や堰の変遷が記されています。

◇東郷陣屋跡

大前神社とは目と鼻の先の穴川橋際の国道添いに石柱が建っているだけ。

尊徳は、嘉永元年(1848)11月から安政2年(1855)4月今市に移るまで在住され、東郷や桑野川村開発事業など、直領地の仕法に努め、斎藤高行や大沢政吉(福住正兄)ら門人に仕法技術や思想をここで多く伝えました。



◇益子(昼食は共販センター・陶芸メッセ見学)

◇茂木

天保6年(1835)から報徳仕法を導入、翌7年の大飢饉では、尊徳の手厚い援助と中村勤農衛らの協力で餓死者



が出なかった恩義に感じて、現在でも報徳会を中心に報徳活動が盛んです。一行は八雲神社の参宝殿において、笹島会長より話を伺い、続いて会長の説明を聞きながら、神井隧道・小井戸の切通し・源吾の堰・能持院などを見学しました。

◇茂木能持院(表紙写真)



茂木細川家の菩提寺で、墓石にかえて杉の木を植え、その前の石灯笼に法名と没年月日を刻してある特異な形式のお墓です。

尊徳の遺言に、「わしが死んだら墓石など建てるでない。ただ土を盛るだけで、傍らに松か杉を一本植えるだけでよい…」とありますが、この細川家の墓と関連して語られることが多いです。

又、茂木仕法の導入に尽力した中村勤農衛(玄順)の墓も、細川家墓地の前下にあります。

◇夕食・懇親会

ホテルグリーンヒルで、温泉に浸り、アルコールも適当に入って談笑し、最後に会員の原正さんの手品の妙技を拝見後散会しました。



2日目 一烏山一

8時45分ホテル出発。天保大飢饉には、尊徳の救援米も通ったであろう道をバスは烏山へ向かう。



◇竜門の滝

高さ20m・幅65m。滝壺に巨大な竜が住むと言われていたが、太平寺の僧が21日間祈ったら、

滝壺から巨大な竜が現れたという伝説があります。

滝に隣接するふるさと民芸館では、アニメで地元の話を紹介したり、烏山の民芸品や土産物が並んでいたり、又、ここから見る滝も素敵でした。

◇太平寺

民芸館から徒歩2分程の小高い所にあり、坂上田村麻呂が蝦夷討伐の戦勝祈願をし、千手観音を安置したと伝えられる古刹。境内には領主大



久保氏の位牌所や物語蛇姫様の墓もあります。

◇天性寺

藩主大久保氏の菩提寺。住職円応と家老菅谷八郎右衛門の二人の熱意で天保8年から仕法が開始されました。



天保7年の大飢饉には、桜町の尊徳からの救援米で連日炊き出しが行われ、多くの人々に給付され、石段手前の左側には12棟の御救い小屋が建てられました。又、円応と菅谷二人の墓もあります。

◇島崎酒造

300余年の伝統を持つ、名酒東力士の酒蔵。工場で見学後、当店自慢の生酒・にごり酒・本醸造・純米酒など種々の試飲に一同大満足でした。



◇昼食

関東の四万十川といわれる鮎漁で有名な那珂川の清流に臨んだ葎簀張りの座敷で、鮎の塩焼きをはじめ鮎料理に舌鼓を打ちました。



◇和紙会館

烏山は、奈良時代から1200年以上の和紙特産の歴史を持つ地。その伝統の和紙づくりの様子を福田製作所で見学(写真上)。会館では和紙製品のいろいろのショッピングを楽しみました。



◇山あげ会館

450年の伝統ある野外劇「山あげ祭」を実物 $\frac{1}{5}$ の動くミニチュアと、ロボット人形の説明で紹介し、実物の彫刻屋台で城下町烏山を紹介しています。



山あげ会館の見学を最期に宇都宮駅に向かい、ぎょうざなど詰め込んで無事家路につきました。

報徳の広場

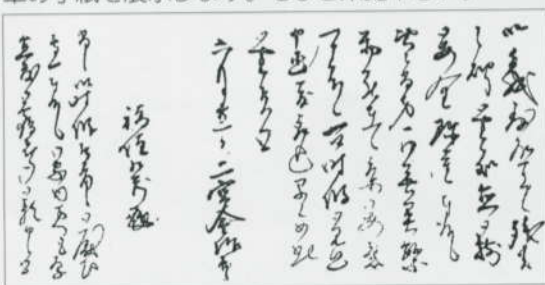
◇小山春山のこと

小田原出身で、近代文学の先覚者と言われている北村透谷が、明治24年11月発行の『女学雑誌』に作品「二宮尊徳翁」を載せています。「尊徳翁は余が郷里の人也。」で始まる文中で、「余、かつて故小山春山に逢い…幼少先生に従い云々」とあります。この春山とは如何なる人物か不詳でした。ところが、今回の見学会で見た「山内明府功德之碑」の撰文・書が彼だったのです。しかも、福住正兄著『二宮尊徳翁略伝』初版本の序文も書いていたのです。そこには「余、少きとき二宮尊徳翁に見ゆ、しかれども、その如何なる人物かを識らざるなり。今にして思えば翁は蓋し古の豪傑の流か。」とあります。



しかし、彼は真岡陣屋の御用金取扱方を努める木綿罔屋の三男で、幕末、水戸に学び、後江戸に出て国事に奔走、文久2年(1862)正月の坂下門外の変の関連者として捕えられ入牢。維新後は浦和県権参事となり正五位を贈られています。『二宮尊徳全集』の日記を精査しても小山春山(直三郎)の名は見出せません。どうも、尊徳と直接見えることは無かったのではないかと思います。

◇第27回企画展のお知らせ
——尊徳並びに尊徳ゆかりの人達の手紙——
期間 8月1日(月)～9月30日(金)
場所 報徳博物館 地下展示室
二宮尊徳はじめ弥太郎・文子ら二宮家の人々や大名・旗本・門人ら尊徳ゆかりの人々約50人の直筆の手紙を展示します。ぜひご来館下さい。



尊徳書状(報徳二宮神社所蔵・県文指定)

◇留学生からのメッセージ

○昨年4月から本館に留学して研讀を積んで来た北京大学大学院博士課程の崔嵐さんが6月24日に研修を終えて帰国しました。

〈崔さんのご挨拶〉

留学の一年間、博物館を始めとした日本の方々から多大なご支援と応援を頂き、豊多彩な生活を過ごさせていいただき、誠にありがとうございました。これからは、この大切な経験を生かして、いつも至誠と実行を心がけて、日中友好の事業のために微力を捧げたいと思います。



○3月に帰国した周冬梅さんの後、4月12日に新しく来日した北京大学大学院修士課程の于丹さんです。最初は大分戸惑いもあったようですが、もう慣れました。



〈于さんのご挨拶〉

北京大学からまいりました于丹と申します。報徳博物館の研究員生として一年間滞在いたします。わたしは、「日本の近代国民道徳教育の特徴について」一考察したいと思っております。

皆さんと仲良くなればと思います。よろしくお願いたします。

◇友の会の現況報告

維持会員(一口10万円以上)

法人会員 20件、個人会員 14件

この会費は、賛助会費として全額を報徳博物館に寄付しております。

一般会員(会費3000円以上)

法人会員 51件 個人会員 209件

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替00250-6-24450